

人間に戻ろう！ 人間らしさを取り戻そう！

J.Feel

人間に戻ろう！

人間らしさを取り戻そう！

～自然や地域とつながる暮らしから、人と組織の生き方を見出す～

ゲストスピーカー

ファシリテーター

森と踊る株式会社 取締役 赤塚 丈彦 さん

とんがりチーム® 研究所 主宰 AKI さん

株式会社ジェイフィール 高橋 克徳

12.16 (Fri)
10:00 ~ 11:00

★ゲストスピーカー

森と踊る株式会社

取締役 赤塚 丈彦 氏

とんがりチーム® 研究所

主宰 / AKI (野口正明 氏)

★ファシリテーター

(株)ジェイフィール 代表取締役 コンサルタント

高橋 克徳

【セミナー開催概要】

皆さん、自然とつながる暮らしをしていますでしょうか？

巷では環境問題、環境汚染が叫ばれて、30年以上経ちますが、自然と密着した暮らしをしている方は少ないのではないのでしょうか。

しかし、もともと江戸時代のご先祖たちは当たり前のように自然とつながりながら暮らしをしていました。そして、世界が戦争に明け暮れる中、経済成長し、人口も増やしていきました。

では、現代の我々はどうでしょうか？ 経済成長を優先しすぎるがあまり生きづらさを感じている方も少なくはないのではないのでしょうか。

本セミナーではカツさん、タケさん、アキさんが自然とつながる暮らし、そしてその暮らしが組織や人生にどう影響を及ぼすのか。そして、人生を充実するためのヒントについて鼎談してもらいました。

これから充実した暮らしをしていきたいと思っている方は、そのヒントが本セミナーには隠されています。よろしければ、こちらのホワイトペーパーをご覧くださいませ。

[高橋 克徳 (株式会社ジェイフィール)]

本日は「人間に戻ろう！人間らしさを取り戻そう！」という、非常に大きなタイトルをつけました。

「人と組織と社会をつなぐ」というコンセプトで「社会、あるいはその先にある自然や地球とのつながりを取り戻していこう！」という思いを込めて、ウェビナーを進めています。

自然や地域とつながる暮らしを始めた理由、実際どんなことやっているのか、そこから何ができてきたかについて、ゲストスピーカーの皆さんにご紹介いただこうと思っています。

まずは私の話を簡単にします。私は今 56 歳です。私はずっと神奈川県で生まれて育ってきました。仕事をやりながら、大学の先生もしています。そんな生活を 30 年続けています。仕事は確かに楽しいし、一生懸命やっています。いやそれ以外に家庭のことも大事にしていますし、剣道も続けています。こういう充実した暮らしをしていく中で、精一杯の生き方は大変だなという気持ちがかんたんと湧いてきました。

このような気持ちが湧いてきた一番大きなきっかけになったのは 2011 年の東日本大震災です。震災が起きた 1 ヶ月後ぐらいに、アミューズが「みんなでボランティアをしよう」と言って、名取市にボランティアに行きました。

行ってみて、目の前に広がる惨状と色々なメッセージボードを見て、その場で涙を流し、動けなくなってしまいました。

強く印象に残っていることは、被災者の一人の方が「ここにさまざまな暮らしがあったのに、もはや町は再生できても暮らしはもう戻らないんだ」と言われたことです。その時私は、ここにいた人たちが日々笑顔で交流し合って、何かを分かち合って生きてきたって、そういう大事なものと痛感したんです。



もう一つのきっかけは、ジェイフィールの社内研修で 2016 年にカンボジアの孤児院に行って、その孤児たちが将来の夢を描くことを支援しに行ったときに、2 人の日本人の存在を知ったことです。

1 人は森本喜久男さんです。かつてカンボジアにはクメールシルク（織り）という伝統工芸品がありましたが、ポル・ポト政権時にほとんど消滅してしまいました。そのクメールシルクを再興して、それを仕事にすることで、戦争で職を失った人たちがちゃんと生活できるようにしようという取り組みを森本さんが中心となって始めたのです。それにとどまらず、村をつかって学校をつかって、ひとつの暮らしを取り戻しました。

もう一人は井津建郎さんです。井津さんはカメラマンなのですがカンボジアに小児病院がなくて、子供がどんどん死んでいくという現実と直面して、自分がこの国のために何かできないかと思って病院をつくったのです。そして世界中の人たちが協力してくれて、いろいろな国から医者が来て、カンボジアの小児医療を支えてくれました。私は、他国の人たちの暮らしを守ること彼らがやっていたことが衝撃で、素直に感動しました。



3つ目のきっかけは、カンボジアに行った 2 年後に行っ

た、地球幸福度が高い国 ベトナムの調査でした。地球幸福度調査とは、自然環境とのバランスを取りながらいい暮らしをしている国のランキングです。ベトナムは世界5位で、アジアで一番高い国です。

事前調査でベトナム人の留学生が日本の印象を述べている記事を見つけました。それは、「日本は世界でも自殺率が高い国のひとつ。電車に乗っていても何かもう睡眠不足で疲れたような表情をしていて、笑っている人がいない」というものでした。続けて、「たしかに日本人は勤勉で一生懸命働いて国を建設しました。しかし、会社や組織への貢献ばかりを考え、自分の成果を享受することを忘れてと思います。ベトナムはまだ貧乏な国だが、困難でも楽観的に暮らし、滅多に自殺を考えません。経済的豊かさが幸福につながるとは限らない。日本人は何のために頑張っているのか、幸福とは何なのか。日本人自身で考えを探した方がいいと思います」。この記事で私は、「本当にあなた方の暮らしてそれでいいのですか」と強烈な問いを突きつけられたと思ったのです。

2018年 ベトナム幸福度調査研究 J.Feel

日本人の暮らし方、このままで本当にいいのだろうか？

地球幸福度調査
(ニュー・エコノミクス財団 2016)

- 1位 コスタリカ
- 2位 メキシコ
- 3位 コロンビア
- 4位 ハヌアツ
- 5位 ベトナム**
- 6位 パナマ
- 7位 ニカラグア
- 8位 バングラデシュ
- 9位 タイ
- 10位 エクアドル
- 58位 日本

「主観幸福度調査結果」に、「平均寿命」と「国内の格差」を掛け合わせ、それを「エコノミクス・フィットネス」(自然環境への依存度のよさ)との数値で積したもので、何世代も幸せに暮らせる場所かを示すもの。

日本人の幸福って何なの？

「日本は世界でも自殺率が高い国のひとつ。電車に乗っていても何かもう睡眠不足で疲れたような表情をしていて、笑っている人がいない」というものでした。続けて、「たしかに日本人は勤勉で一生懸命働いて国を建設しました。しかし、会社や組織への貢献ばかりを考え、自分の成果を享受することを忘れてと思います。ベトナムはまだ貧乏な国だが、困難でも楽観的に暮らし、滅多に自殺を考えません。経済的豊かさが幸福につながるとは限らない。日本人は何のために頑張っているのか、幸福とは何なのか。日本人自身で考えを探した方がいいと思います」。

<https://www.madameriri.com/2016/08/31/vietnam-worlds-fifth-happiest-country/>

© Copyright J.Feel Inc.

ベトナムに行ってから26名の人にインタビューをしました。

朝からコムと呼ばれるレストランで朝食を取りながら、近所の人たちが笑顔であいさつし、会話している。そして仕事が終わって家族で食事をした後に、友達同士で会って、楽しそうにいろんな話をしている。それが日常の暮らし。彼ら・彼女らは、日々つながりの中で生きているのだなと感じました。

ストレスがない社会をつくらうということをみんなが意識していて、人のつながりがあるから何かあったときに相談できるし、仕事がつらいと思ったときに、「じゃあ仕事を紹介するよ」と互いに支援し合える。そのようなセーフティネット

が広がっています。

この3つの経験がきっかけになり、改めて私は「暮らし」とは何かということを真剣に考え始めました。

すると今まで見えてなかったことが見え始めました。例えば、日本の食料自給率は35%と低いですよね。そして、肥料、種の自給率は10%程度しかありません。その事実を知ったとき、「もしかして自分たちでそういうものをつくるということをやらないと、食べ物が手に入らない時代が来るかもしれない」と本気で思ってしまいました。何もつれない、誰も頼れない、そんな暮らしでいいのか。暮らしを変えようと思ったのです。

移り住んだところが山梨県上野原市で、決め手は人でした。街を歩いて、ふと出会ったおじいちゃんおばあちゃんが声をかけてくれますし、こちらが声をかけるとすぐニコニコ話をしてくれました。こういう場所だったらつながりがうまくつくれそうだなと思い、移住を決心しました。

移住したら、本当にいろんな人がすぐに話してくれる、収穫物を持ってきてくれる、色んな事を教えてくれる。自然の日々の変化も本当に感動することばかり。自然や地域とつながりの中で生きている。そんな実感が持てる日々。これが暮らしなのかもしれないと初めて思えました。

大地を再生することが、暮らしを守る J.Feel



大地の再生 矢野智徳さん

**水脈はみんなで守り
みんなでつなぐもの(結)**




© Copyright J.Feel Inc.

この暮らしの中で2つの大きな活動をしていて、その1つが大地の再生活動です。この活動から、森の再生と、自然農の力を学びました。ここからは、そんな活動を実践されている赤塚さんにバトンタッチをしたいと思います。

[赤塚 丈彦(森と踊る株式会社)]

森と踊る株式会社の赤塚丈彦と申します。どうぞよろしくお願ひします。

私のテーマは「問いに導かれる旅」と少しかっこよくして

みました。

私は大学を卒業して、地元の高校で非常勤講師を1年間だけやりました。その後は教員にはならずスポーツクラブの運営会社に入って、1年ぐらいで人事部に異動して、その後ほぼほぼ人事部門で仕事をしていました。

その後、ITのベンチャー企業に転職をしまして、人事部門長として、人事制度づくりなどで4年ほど過ごしました。その中でコーチングに出会って、ああ、これだなと思ってピンとくるものがあって、その資格を取得して独立して今はコーチングや研修講師を生業としています。

私の中でずっとある問いがありました。「この社会、何か変だな」というものです。この何か変な社会を自分の子供や周りの子供たち、その次の世代にこのまま渡していいんだろうかという問いがずっとありました。

そんなときに出会ったのが「Change the Dream Symposium」というワークショップです。これはアメリカのパチャママ・アライアンスという団体がつくったワークショップで、その目的は

「地球上のすべての人が環境的に持続可能で社会的に公正で精神的にも充足した生き方を実現すること」です。

実は、今の地球上の特に先進国の人たちは環境的に持続不可能で、社会的に不公正で精神的にも充足しない生き方をしているんじゃないか。こういうことがあるからこそ逆にこの裏返しが目的になっているのだと感じました。

ここで、どんなことをしていったのかと言いますと、まずは、このChange the Dream Symposiumのファシリテーターになることを皮切りにして、そのChange the Dream Symposium、略してチェンドリと言っていますが、これを日本に広めていくためのNPOを立ち上げました。

このChange the Dreamは、元々はエクアドルのアマゾンの支流に住むアチュアル族という先住民の呼びかけから始まった活動です。そのアチュアル族に会いに行き、本当に自然と一体になって森の中で過ごしている人たちと対話をして、山岳民族のケチュア族という人に会い、本当にこうやって生きている人たちがいるのだと実感しました。

2017年にはクレストンというところでジョン・ミルトンさん

がやっているThe Way of Natureというワークショップに参加しました。

これは、10日間のプログラムでそのうちの6日間を森の中で、たった1人で過ごすプログラムになっています。森に入る前に、瞑想とか、それから気功を教わり、6日間の中で習った瞑想や気功を自分だけで行ったり、あるいはボーとしながら過ごしました。食べるものも断食をして過ごしました。

いろいろなことやってきてここにたどり着いて、この6日間のSoloでふと気づいたことが大きくは3つありました。

1つ目はあるとき瞑想してふっと目が覚めた瞬間、周りにはいる木とか石とか虫とかそんなものが自分とまったく同じ存在に感じられたのです。ただただ地球上にあるものは、ひとつの存在としているだけで、そこには上も下もない。今は人間が何かを所有するとか、されるとか、そのようなやり取りが繰り返されますが、それも全くなく、ただただあるものだなということに気づきました。

そして、2つ目は生き物とのつながりに気づきました。森ではさまざまな生き物が出てきましたが、ハエ、トカゲ、リス、鷹、最後は鹿が出てきました。このとき私は、「生き物すべてと自分たちはつながっているんだな」と感じて、ギフトをもらっているのだと気づきました。

最後の1つは、地球上における唯一の絶対法則は結局、自然の摂理だなと感じられました。世の中ってただその通りに巡っているだけ。しかし人間は自然の摂理とは合わない形のルールや縛りをつくって、何かあくせくしているなど感じたのです。

だから、本来は、自然の摂理に従っていることがこの世の中、この世界の姿であるにもかかわらず、何かそれにあがったことを人間たちがしてしまっているのではないかと。では私たちが摂理に従って生きるためには一体どうしたら良いのだろうかという新たな問いが生まれました。

6日間のSoloでの気づき

- ・木も石も動物も虫も植物も自分も、ただ地球上にあるひとつの「モノ」上下もなく「所有する/される」でもなく、お互いただ地球上の「存在」
- ・生き物とのつながりがギフトをもたらしてくれる
- ・この世の「絶対的法則」⇒自然の摂理。ただその通りに巡っているだけ

自然の摂理に従っているのが世界の姿

問い

私たちがその摂理に従って生きるには?

そして、いろんなキーワードに出会いました。まず1つパーマカルチャーです。これはパーマナントとアグリカルチャーを掛け合わせた造語です。農業を中心とした永続的な暮らしや生き方についての考え方とそのデザイン手法ということです。つまり、実際の暮らしをどのように創っていくのかということです。永続的に続いていく暮らしを創るための考え方、デザイン手法には、3つの倫理があります。

1つ目 Earth Care、つまり、地球を大事にすること。
2つ目 People Care、自分や人を大事にしていくこと、
そして3つ目が Fair Share です。みんなで分かち合い、与え合おうということです。

パーマカルチャー

Permanent (永続的) + Agriculture (農業・文化)

農業を中心とした永続的な暮らし・生き方についての考え方とそのデザイン手法

3つの倫理

- Earth Care (地球を大事にすること)
- People Care (人も自分も大事にすること)
- Fair Share (みんなで分かち合い、与え合うこと)

この3つはさきほど説明した Change The Dream で言っていたことと重なるなどはと気づきました。環境的に持続可能でというのは、Earth Care のことです。社会的に公正でというのは、People Care の話で、精神的に充足というのは、Fair Share で、みんなで分かち合うと、とても心が豊かになります。

それで日本を見たときに、里山は既にパーマカルチャーのような暮らしをしていたのです。これは生物多様性の豊かなこの日本であるからこそ、木も植物も菌、虫、獣、鳥、本当に多様な生き物がうまく棲み分けながら、そして共生していく、そんな暮らしをしていたのが日本の暮らし、里山です。ですので、日本の暮らしの中にこそ答えがあると考えました。

そこで大切になるのが自然農です。かつて日本は特に化学肥料や農薬を使わず、農業を営んでいました。自然農とは、自然の生き物の働きや自然の循環システムを使いながら作物を育てます。これを学び耕作放棄地をお借りしまして実際にやってみようと思いました。

そこに畝を立て、鳥に邪魔されないように網をかけ、獣が入れないようなネットをつくることで、畑ができてしま

た。

みなさんとこの感覚を分かち合いたいと思い、「恩方くらしラボ」で耕作放棄地を使わせてもらえることになったので、仲間に声をかけて、自然農を始めてみようと思ってきました。

くらしラボと言っているので、畑で作物づくりだけではなく、土地も使い、森もある中で自分たちの暮らしに生かせることを実験しています。東大やソニーで研究している自然農の実験もここでしています。



実際にやってみると、すごい豊かな作物が実るわけです。そうすることで、「自分たちでも作物ができるよね」という感覚が生まれます。

こうして作物をつくることはやっぱり気持ちが良いです。そして、行動してみると何か見えてくるものがあるから言語化する。

うまくいかなくとも何とかしなきゃ、何か間に合わせられないかな、循環させられないかなと周りを見渡して、そこにあるもので何かやってみる。そこにクリエイティビティがあると感じています。そうすると自分自身がつくり出せるんだという確信と自信も沸いてきます。つくり出せる自分というのは、社会もつくり出せる、一番ベースとなる自分に対しての確信と自信になるのだと感じています。

手元、足元からつくり出せるというのが、何か地続きで大きなものにつながっていくのかなということを感じているのが今の私がいるところです。

[高橋 克徳 (株式会社ジェイフィール)]

タケさんありがとうございました。では今度は AKI さん、お願いします。

[AKI (とんがりチーム研究所 野口 正明)]

AKI と申します。よろしくお願いします。

僕は対話型の組織開発のコンサルタントを主に企業向けにやってきました。企業ビジネスどっぷりだった人間でも曲がりなりに地域や自然と関わってやっていけますという事例をご紹介します。僕は「地域コミュニティ」の話します。藤野は相模湖畔のまちで人口が約 8500 人の典型的な中山間地で、そこに暮らしてもう 9 年になります。ここでの暮らしからの気づきをシェアします。

まず、なぜ地域コミュニティとつながろうと思ったのかというと、衝動的な動機からです。僕は、2010 年頃、東京の世田谷・千歳烏山という大変便利で大好きな街に住んでいました。ある時、近くで（ワークショップを日本に広めた）憧れの存在＝中野民夫さん（民ちゃん）が講座を開くことを知りました。彼に会いたい一心で西荻のほびと村で開催された全 6 回の講座に通いました。

講座に出て、頼まれもしないのに毎回レポートを出しているうちに民ちゃんと仲良くなってきて、そんな時に彼から声をかけられ「AKI、ちょっと手伝ってほしいことがあるんだ」と言われて彼のお手伝いをするようになりました。それが 3.11 後に被災したいわき市の沿岸部の支援でした。それが僕にとっては人生ではじめての社会活動への関わりだったのです。

その後、藤野に移住するきっかけとなる重要な出来事がありました。2013 年夏に、スコットランド北部の知る人ぞ知る世界的なエコビレッジであるフィンドホーンで非暴力コミュニケーションのワークショップに参加しました。いったいここで何が行われるのかもまったく知らないまま、直感を頼りに思い切って参加してみました。世界中から集まった仲間たちと一週間にわたり、自然環境豊かで、自給自足的な暮らしを営んでいるコミュニティの中で、ひたすら対話を繰り返しました。40 数名の参加者の中に 1 人だけ日本人がいて、それが榎本英剛さん（ヒデさん）という、日本にコーチングを広めた第一人者です。

彼は藤野から来ていました。ヒデさんたちが取り組んでいることは、トランジション・タウンという、エコビレッジのように困われた場所ではなく、普通のまちの中で、想いのある人たちがゆるやかにつながって、持続可能なまちや社会づくりに向けて楽しみながら活動をしているとのこと。その話は、僕とパートナーが夢に描いていたものに近く、帰国

後、衝動的に東京からの移住を決めました。

そんな藤野のコミュニティに入って面白かったエピソードを 3 つご紹介します。

1 つ目は、このコミュニティは本当にお互いに助け合うことが当たり前ということです。例えば 2013 年の年末に引っ越したときのことです。直後から、足りない家財道具をもらったり、とれたての野菜をもらったり、引っ越し疲れを癒すためマッサージしてくれたりといろいろと助けてもらいました。自然と僕も恩返しをしたいな〜という気持ちが盛り上がりました。

そんな折、2014 年 2 月に藤野で 80 年ぶりとなる大雪が降りました。僕はその時大阪に出張に行っていたので、2 日間ほど足止めを食らって帰って来られませんでした。なんとか帰ってきたら、雪に埋もれて身動きが取れない人がいることをメーリングリストを通して知り、僕は居ても立ってもいられなくなって、丸一日雪かき作業を手伝いに出かけました。まだ出会っていなかった人たちと一緒に 1 日中雪かきして、やっとこのコミュニティに恩返しできたな、参画できたなと感ずることができました。今でもこのエピソードを思い出すと嬉しい気持ちになります。

2 つ目は、自分たちでできることは自給自足的にやってしまうということです。藤野には人口 8500 人のうちアーティストが 500 人ほどいると言われています。アーティストは物づくりが得意なので、藤野ではお金をかけずに市民による手づくりのイベントを年中やっています。

例えば、みんなで集まって竹林に入って、何本か伐採し、アーティストが描いたデッサンをもとに立派な手づくりのドームをつくらします。藤野のイベントは、企画運営者も、出演者も、飲食を提供する人も、基本的にすべて市民がおこないます。つまり、全員が「つくる人」というわけです。

最後は気候変動が地域に与える影響について市民で調査・研究をして、行政に頼らず、自分たちで考えて実践するという活動＝「気候変動の地元学」というものもやっています。正直、僕自身は何年か住んでも、気候変動が地域にどんな影響を与えているか、全然ピンと来ていませんでした。しかし、この地にずっと暮らしを続けている人たちにとっては、例えば、花の咲く時期が早まる、虫

の種類が変わってくる、あるいは雨が降ったときの増水のスピードが早くなっているなど、すぐくつぶさに観察しているんです。

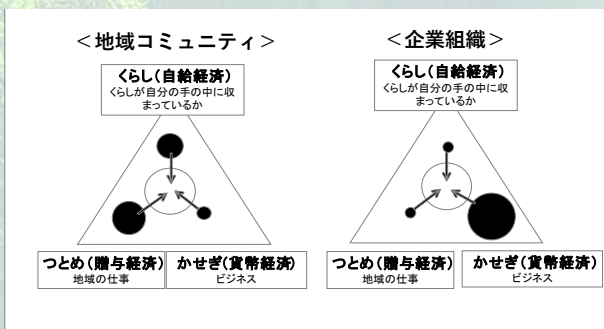


「気候変動の地元学」は、法政大学のサステナビリティ研究所がガイドしてくれました。その調査員の方々も驚くほど、地域の方々から気候変動の影響が事例として出てきて、それをベースに僕らの中で重点的に取り組むべき課題を設定して、具体的に実践しています。

こうして僕は地域コミュニティに関わって9年になりますが、一方で企業向けの対話型組織開発のコンサルタントとして活動して17年になります。両側の活動から見てきたことは、企業社会の原理と地域社会の原理は明らかに違いがあるということですね。

それを比較するのに、経済を切り口にする面白いと思い、図をひとつ持ってきました。

今見ていただいているのは、2014年にさきほどお話ししたトランジション・タウンの活動の一環として「仕事と経済」というワーキンググループが立ち上がり、僕はビジネスの第一線でやってきたという自負があったので、ここなら貢献できると思い参画しました。その時まで僕の中では「貨幣経済」=経済だと思っていました。しかし、地域の中で経済について話し合いながら見てきたのは、実は経済は3つあるということです。

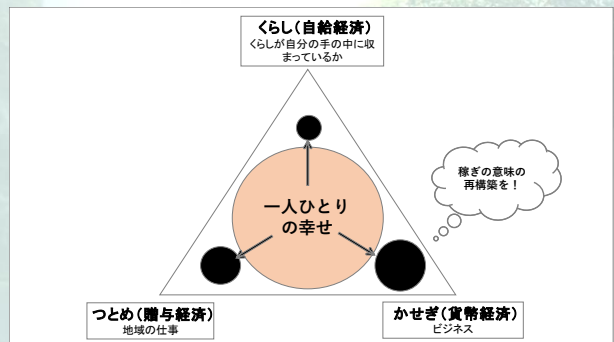


1つ目は「自給経済」。どれだけ「暮らし」が自分の手の中に収まっているか。例えば野菜を自分で作り、電気の一部を自分でつくって暮らしていくということです。

次に「贈与経済」です。これは「つとめ」とも言っていますが、1人ではとてもできないような、地域みんなの暮らしのためになる何かと一緒に協働して行うことを指します。最後が「貨幣経済」。「かせぎ」ですね。経済を考えたときには、この3つのバランスがいかに取れているかが重要になるわけです。

結論からいえば、藤野のような地域コミュニティの中では、「暮らし」、「つとめ」のところはすごく充実していますが、一方で「かせぎ」はなかなか厳しいということ。今でもなかなかそこはいい解決策は見つかってなくて、いろんな人がいろんなチャレンジをしている段階です。一方で企業社会では真逆の構図になっているのではないのでしょうか。「かせぎ」が圧倒的に多くて、「暮らし」と「つとめ」は非常に貧弱な状況だと思います。僕はその両方を体験してきた中で、3つの経済をかならずしも等分にバランスさせてもいいのではないかと今は考えています。つまり、人によってこのウエイトは変わってもいいということです。

何が言いたいかというと、一人ひとりが、自分自身の根源にある欲求に気がついて、それをもとに3つの経済についてどんなウエイトが一番いいのかを自分の中で認識し、納得していることが必要だということです。つまり、「かせぎ」がメインだからといって、決してそこで罪悪感を持つ必要もなく、「かせぎ」の意味を3つの経済を見渡した上で再構築すればいいと考えています。



それぞれが自分自身の幸せを手にするために、どこでどう暮らしていくのかを考え直すことが大事ではないかなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

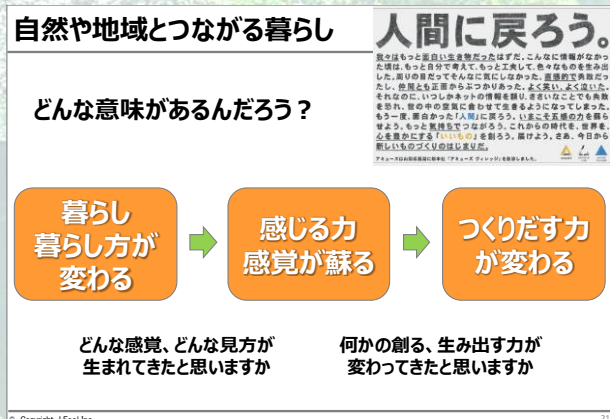
[高橋 克徳 (株式会社ジェイフィール)]

お二人のお話を聞いていて、暮らしが変わるということが大きいなと感じました。

今の多くの人たちは仕事を中心、会社に仕えていく仕事を中心で、遊ぶのは週末だけ。しかも、遊びといっても今の時間を消費することが遊びになっている。

しかし、暮らしが変わると、その暮らしの中から務めが見えてきて、地域の人たちとの関わりの中で何か仕事が生まれてきて、遊びも今を消費する遊びじゃなくて、AKIさんが良く言っているように明日に備えるための遊びが増えていく。

そうするとそこから何か自分が本当にやりたいことが見えてきて、誰かのために何かをしたいという仕事に変わっていくのではないのでしょうか。さきほどの稼ぎも生きていくための稼ぎという意味も確かにありますが、何のための仕事なのか、仕事の位置づけが変わっていくことが、暮らしを通じて見えてくるということがとても大事になるのではないのでしょうか。



[赤塚 文彦 (森と踊る株式会社)]

そうですね。今カツさんが言ってくれたように、実際に自分の暮らし方が変わっていく。そこに作り出すというものが何か入ってくることによって、見えてくる世界が変わってくるんですよ。

[AKI (とんがりチーム研究所 野口 正明)]

今日3人の話の中で「暮らし」というキーワードがたくさん出てきたと思いますが、移住して「生活」が「暮らし」にシフトしてきているなという感じがします。これ英語にするとどちらもLifeだと思えますが、Lifeは日本語にすると広い幅を持っていて、生活から人生から、あるいは命まで含

む意味合いを持っています。

「暮らし」というのは、「生活」からより人生や命に近づききっかけになりえます。それをどう自分の中で感じて、行動していくのか。そのいい循環で起きてくると、よりよいLifeが送れるのだと思います。

[高橋 克徳 (株式会社ジェイフィール)]

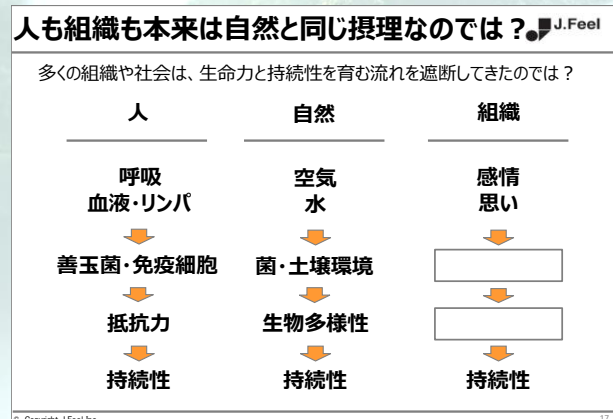
暮らしという言葉を広く捉えると、人生そのものかもしれないですし、そこにある生活そのものかもしれません。みんなに必ず暮らしがある。その暮らしが何かいろんなものとながっているかがとても大事な気がします。

それがあることによって、地域で起きていることにもどんどん関心が出てきたり、自然の中で起きていることも、それこそ他人ごとじゃなく、誰かがやってくれるのではなく、自分たちでどうにかしたいことになっていく。

別に移住することがすべてではないですし、移住して生活を考えると大変なこともたくさんあるのが現実です。しかし、移住するかどうかにかかわらず、暮らし方を変えるということは、何か大きな意味を持つとは思いますが。

加えて、自然を学ぶと、自然の持つ力、自然の摂理を知ることができます。例えば今、土砂災害が起きやすくなっているのは、人間が擁壁や人工物をつくり、水と空気の流れを遮断したことで、森の保水力、健全な生態系を育む力を弱めたことが大きな原因になっています。でも、水と空気の流れを整えることで、土中環境がよくなっていき、さまざまな生態系が生まれ、保水力のある森、持続可能な森に再生していくこともできます。

自然の摂理は私たち人間にとっても同じで、組織にとっても同じではないかと思いました。



[赤塚 文彦（森と踊る株式会社）]

菌が土中環境で何をやっているかという、養分、空気とか水を受け渡した役割を担ってあります。そうすると組織の中でも、感情や思いを受け渡す人がとても大事だと思います。

感情の循環をつくることで、組織の持続可能性につながっていくと感じています。

[AKI（とんがりチーム研究所 野口 正明）]

この点線の中に人そのものを入れるとちょっとおかしなことになる気がしています。というのは、自分も含めて人間はエゴからなかなか逃れられませんよね。だから、なかなか菌のように純粋な作用はしにくいんじゃないかなと思います。僕はここには人が入るというよりも、もっと一人ひとりの心の奥底にある根源的な欲求のようなものが菌にあたり、そこから発想した方がいいのではないかと思います。

[高橋 克徳（株式会社ジェイフィール）]

自然の中にある摂理を何か体験してほしいですし、まずは知ってほしいです。

菌はむしろリーダーの役割が大きいのではないかと考えています。菌の役割はいろいろなものをつないでくれるし、分解もしてくれる。したがって、さまざまな栄養分を蓄えてくれます。それが組織では組織風土、自然では土中環境だと思います。そういうものを豊かにしていくと、そこに人が生き生きとしはじめるし、まさにいろんな多様な人たちが力を発揮していく組織になるのではないのでしょうか。

そういうことが当たり前のようにできている組織。反対に、感情や思いも流れていかず、そこにいろんな壁ができていて、育つ土壌ができていなくて、生まれてくる人たちも同質化していき、主体性や創造性を失う組織。今はどちらかというと後者が多いように感じます。

自然とつながった暮らしのあり方を体験することによって、組織のあり方、人の生き方など、いろいろな形で結び付けられる機会になっていくと思います。

本日のセミナーが考えるきっかけになれば幸いです。

～終了～